

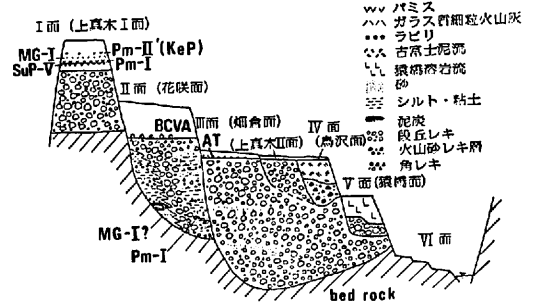
相模川上流部の河岸段丘

渡 辺 悌 二 (自 然 学 類)
小 野 有 五 (地 球 科 学 系)

相模川上流部のいくつかの河岸段丘面上には、AT, Pm-Iなどの示標となるテフラが見られる。これらのテフラをはじめとする火山噴出物や段丘礫層によって河岸段丘はI～VI面の6つの段丘面と上野原付近にのみみられる大割面の合計7つの段丘面に区分することができる。

第I～VI面までの各段丘面と火山噴出物との関係を第1図に示した。第I面は寸沢嵐ロームに覆われる最高位の段丘面で段丘礫は極めて風化している。第II面はほぼBCVAの降下期頃に離水しており、礫層中下部にはPm-Iが水成で見出される。第III面はAT降下期頃に離水したfill top段丘で、第IV面(本流では古富士泥流のをせる)はfill strath段丘である。第V面は風成テフラはのせないが本流部では猿橋溶岩流に覆われるstrath段丘面、第VI面はそれ以下の低位段丘面群である。

特に第IV面の形成とそれ以降の発達史について考察すると、本流では第III面をつくる礫層に比べて第IV～V面の礫層中で富士山起源の礫の含有率が著しく増大することから、この時期に火山活動に伴う富士山からの岩屑供給が増大したことがわかる。また、大月より上流では猿橋溶岩流が第IV面を覆うようになり本流での第IV～V面は基本的には富士山の活動に制約されてつくられていると考えられる。これに対して、真木川上流部などの支流部ではAT降下期前後から斜面物質の供給が活発化し、段丘面の離水期は10,000y. B. P.頃まで遅らされており(第1表)、最終氷期末期の斜面の不安定化が第IV・V面の形成に関与していることが考えられる。



第1図 相模川上流部の段丘模式断面図

第1表 大月周辺の河岸段丘の編年

階層年代 x10 ⁴ y. B.P.	テフラ	河川 (大月-上野原)	地形 真木川 巻野川	河床高度の相対的 変化 (真木川) Om	相模川中流部・ 上流部の段丘面 との対比 60
1	MG-I Pm-II (KeP) Pm-I	IV V VI	IV V VI	Accum.	栗多世 段丘面群 関東I面 関東II面 関東III面
2	S-S AT	III	III	Accum.	田名原I面
3		II	II	Accum.	丹波野面
4	BCVA	I	I	Accum.	増穂野面
5	TP			Accum.	
6				Accum.	
7	MG-II Pm-I			Accum.	
8				Erosion	大野面 サア島面

